

幼なじみ

益池 成和

私にとって最初に出会った幼なじみだった。

かつてあった彼の家は、私の家のごく近所にあった。十年前、売りに出され、隣の人が買い取り、今は砂利をさらした駐車場になっている。

彼の訃報を聞いたのは三月半ばのことだった。日曜の朝、朝食を食べ終わって、応接間のテレビの前でくつろいでいた時に、不意に携帯が鳴った。見ると幼稚園からの同級生からのものだった。

「おう、毎度」と私はいつもの応対の仕方電話に出た。

彼はかつて近所に住んでいた男の名前を出し、

「今朝、死んだらしい。さっき、連絡があった」

そう言って彼は訃報を伝えてきた同級生の名を出した。その彼女は亡くなった男が転がり込んで同居していた女の友人でもあった。彼女自身ゴルフ好きということで、亡くなった男とも親しい間柄だった。

「ねえさんに知らせやなあかんと思ってるんやけど、おまえ家知ってるやろ。付き合ってくれへんか」

私は同居人からすでに連絡は入っているはずだと思いながらも承諾した。

彼の姉は私の隣町に住んでいる。周辺には彼の叔母二人の家もあり、すでに空き家のまものはずだが、祖父母が晩年暮らした家も残っているはずだった。

「すぐ行くから、店で待っていてくれるか」そう言って電話は切れた。

私は洗い上がった洗濯物も干さずにあわてて家を出た。

同級生がやってきたのは、店に着いてから小一時間ほどたってからだ。私の店から姉の家は車で五分も経たずに着く距離にあった。姉とは隣町に住みながら、交流らしいものはなかった。名前さえもにわかには思い浮かばず、当たりをつけた家のチャイムを押すと、隣だと教えられた。

姉はすぐ出てきた。一緒に行った男が、同級生の死と、これからのことを慎重に切り出した。門扉から離れたままの姉は、弟のことは既に知っている様子だった。そして、

「あの子とは、一切縁を切っているの」と視線を落としたまま言った。

「あの子には、私たちも色々と迷惑かけられたし、……生まれ育った家も勝手に売り払ってしまったし……。かわりは、もう一切……」

予想できる言葉だった。

幼なじみが倒れたのは五年前のこと。コロナ騒動が日本中を席卷していた年の秋のことだった。私はその知らせを、その時も一緒に姉の家に行った男からの電話で知った。

早朝トイレで卒倒したという。同居人が仕事場に向かう直前だったので、救急車を呼ぶことが出来た、という話だった。大病院に運ばれたらしいのだが、脳幹出血ということで、極めて深刻な状況とのことであった。

病名を聞いて、私は即座にとっても助からないと思った。というのは、その前年私の町の区長が、暮れも押し詰まった十二月に突然倒れ、十日も経たずあつてなく逝ってしまった

事があった。当時私は町会の協力委員の一人だったので、その区長とはそれなりに親しくしていたこともあって、かなりショックを受けたことがあった。

二、三日経ってから倒れた男と同居している女から、さかんに見舞ってやってほしいという話がある、と知らせをもたらした同級生が言ってきた。私は奇妙な思いを抱いた。いまだ男は集中治療室にいるはずだし、ましてコロナ禍である。身内以外の者に見舞いが許されるはずがない。よくよく聞いてみると、倒れた男の面倒を見ざるを得なくなった女が、私達に関わりを持ってほしがっていることのようなだった。

女のマンションに転がり込む羽目に陥ったのは、幼なじみが生家を売り払ったためでもあった。駅前の飲み屋街で流布していた噂によると、家を売却した金を女の借金に充てたという。

私も独り身が続けていることもあって、駅前の飲み屋街には四十半ばあたりから時折顔を出すようになっていた。もつともこの幼なじみとは同級生の集まり以外では、一緒に店に繰り出すことはなかったが。

彼には妻も子供も居た。家庭を持つ男が、毎夜のごとく、飲み屋街をうろついているという話を聞くようになったのは、彼が自宅を売却する数年前からのことだった。当初は別の店だったようだが、いつの間にか、後に同居することとなった女が営んでいた居酒屋に入り浸るようになった。その店は、女が一人で切り盛りしていたわけではなく、皆にマスターと呼ばれていた男がいた。小柄な男が料理を作り、女は接客専門のようだった。

私も何度かその店を利用したことがあった。自ら好んで通ったことはなかったが、幼な

じみが関わりを持っているということで、同級生の集まりでの忘年会や新年会で、使つてやろうということになったのである。

あくの強い店主だった。どうかすると勝手に客達の会話に入ってきて、居合わせた者を批判したり、あしざまに言うことも全く平気なのである。怒り出す者もなかには居たが、騒がしさが増すと男が厨房から出てきて、上手に丸め込んでしまう。

当時は周りの店舗がシャッターを閉じてても、深夜の三時頃まで明かりを絶やさなかったこともあり、それなりに店は繁盛していた。

その年の夏過ぎのことだったろうか、女の店が向かい側の空き店舗に移る、という話が舞い込んできた。

人の良さそうな夫婦と、二十代半ばと思われる娘がいた寿司屋だった。個室も備えられていて、結構金がかかった店という印象がした。が、それなりに客が入っていたのは、開店当初のごく短い時期だけで、すぐ閑古鳥が鳴くようになった。それもそのはずで、寿司屋というのは名ばかりで、おそらくは店主はまともに修行もしないまま、開店にこぎ着けたに違いない。小さなネタが載った何の特徴もない寿司ばかりで、はなからいかにも素人商売という有様だった。店は二年も持たなかった。

最初の女の店は客が十人も入れば肩が触れあうような手狭さだった。だから広さを求めての移転だろうと私は思った。ところが、新店舗は新しい年に入ると、すぐさま営業をしなくなった。

私はこの年、年明け早々に国立病院に入院した。十五年前に受けた股関節の人工骨の取り替えのためであった。術後一週間ほどしてから見舞いに訪れたくだんの同級生が、

「けったいなことになっている」といって、女の店のことを教えてくれた。

年が明けて十日も経たないのに、移転した店舗のチャッターが閉まったままだというのである。

どうやら厨房を任されていた男との間でトラブルが表面化し、その男が店を出て行ったというのである。

私は勝手に店の二人を夫婦だと思っていたが、同級生の話によると、一緒に住んではいたが、籍は入っていないという。しかもここ最近ふたりの仲がおかしくなり出してきて、そこに店の移転話が持ち上がった。そのようなタイミングの最中、幼なじみが店に足繁く通うようになったというのである。

当時私の幼なじみはまだ事業に失敗する前で、それなりに蓄えがあった。店の移転話が持ち上がったとき、女が同居していた男に資金援助を求めたが、きっぱり拒否されたという。後になって私は、店の移転話そのものが、女が幼なじみと長らく厨房に立っていた男を天秤にかけたゆえの行動ではなかったか、と疑ったものであった。

実は私と幼なじみは、同じ町内会というだけでなく、かわりが以前からそれなりにあった。幼いときは同じぶどう農家だった。私が中学校にあがる頃から、付近に様々な工場が進出してきた。私の家はいち早く、ぶどう農家から子供服の縫製工場に鞍替えしていたのだが、程なく大手の企業が働き手を確保するあおりを受けて、縫い子さんたちを集められなくなった。そこに今は生産台数世界一位を誇る自動車メーカーが、修理工場の敷地を求めて土地の賃貸話を持ってきた。私の父は幼なじみのところとともにその話に乗った。

後に父親から何度か聞かされた話なのだが、随分と周りからは不穏なことを言われたらしい。土地を取られてしまう、などと。今にしてみれば、馬鹿げた事なのだが、何しろ周りは田畑しかかった時代の話である。土地を貸し出すことでお金を得るなんてことは誰も知らなかったに違いない。実際幼なじみの家ははじめこの話に大反対だったらしい。ことに祖父母が強硬だったと聞いている。それを私の父と彼の母親が一緒になって説得し契約にこぎ着けた。私の父が経営していた縫製工場に彼の母親も縫子の一人として手伝ってくれていたので、そのことが功を奏したに違いない。私が地元中学校にあがったばかりの頃のことである。

私の父とともに土地の賃貸話を進めた彼の母親は、その数年後あっけなく亡くなっている。たしか私が大学に上がる前後のことである。おそらくはそのあたりの事も関係があったかもしれない。幼なじみは母親の取り分の土地の賃料を早々に譲り受けている。自動車メーカーとの契約は二年更新になっていたが、最初の更新時の契約書にそのことが末尾に記されていた。未成年だったので、後見人として父親の名がしるされているものの、彼は学生の身ながら毎月決して少なくはない賃料収入を得ていたことになる。彼の父親は二代続けての養子さんだった。

彼と私は社会人になってからは、大してかわりがあった訳ではなかった。彼はスポーツが得意であったが、私は文化系の男であった。中学校までは同じだったが高校大学と違ったところに通った。わずかに就職した先が同じ繊維関連で、扱う品目のうち靴下が共通しているというぐらいのことで、これといった行き来もなかった。彼の会社は大手商社の

子会社で、私の就職先は、北海道から出てきた男が立ち上げた従業員七名ばかりの商店であつた。

私はその会社を一年も経たずに辞めてしまったが、彼は何年かは踏ん張つたようだ。

それでも同じ町内に住む者同士である、顔を合わすことはめつたに無かつたが、やはり動向はそれとなく伝わってくるもので、彼も数年後に繊維関係の会社を辞め、ある大阪市内の病院の事務職に就き、そこも数年で辞表を書いたと聞いた。その後半年ほどはパチンコばかりをやって暇を潰していたようだが、それを見かねたのか、同じ町内の人が近所にデイスカウントの酒屋を経営していたのだが、手伝ってみないかと誘つたようだ。その社長と彼は幼少の頃から交流があり、後になって店長にも指名され、しばらくは勤めていた。

私はその間、靴下会社を飛び出してから、親の金で持たせてもらった店を一人で細々と続けていた。最初は毛布のハギレをつなぎ合わせて再生したような寝具や膝掛けを売っていた。次にクリーニングの取り次ぎやたばこの販売もしたりした。もっともいずれも大してお金にはならなかつたが。

ちょうど自動車メーカーとの賃貸契約が切れて七、八年ほど経つた頃、珍しく店に顔を出した幼なじみが、

「俺も四十を過ぎたんで、ここらで何か一つやってみたいんだ」と言ってきたことがあつた。

土地の賃貸契約が切れた後、私の所はなんとか周辺の企業に短期の貸し出しを繰り返していたが、彼が関わる土地は、権利者が多いということもあつてか、返されたままになっていた。そこにドーム型の建物を建て、テニスコ場経営に乗り出すという。たまたま私の

所も契約が切れた後で、貸してくれないか、という話だった。賃料を払ってくれるなら、と答えた。すると彼は私にも経営に参加しないかと言い出した。その申し出には驚いたが断った。他に出資者がいるだとか、コーチが客を引き連れてくるから大丈夫だとか言っていたが、とても乗れるような話には思えなかった。その時建設費用の話もでたのだが、その計算がとても信じるに価するようなものではなかった。彼は具体的な返済期間を口にしなかったが、総額費用の割に月々の返済金額があまりに安かった。

このテニス場経営の話は、まもなく頓挫した。地権者の一人でもある上の叔母が泣いて事業断念を説得したという。

彼の事業話を聞いて、私の同級生達も町内会の人々も、誰一人賛同するものはいなかった。皆一様に無謀な事はやめておけと言い続けていた。おそらくはこの話を後押ししていたと考えられる、コーチの面々以外は。この時期駅前の飲み屋街で、私も幼なじみとテニスコーチと思われる三人ほどの取り巻きを何度か見かけてもいた。

が、結局彼は事業を断念することはなかったのである。一年ほどしてから、別の場所で規模を縮小してやるという話が伝わってきた。今度は屋根のない何面かのテニスコートで始めるのだという。

計画が具体化して動き出した後、彼が私の店にひょっこり現れたことがあった。どのような要件でやってきたのかは忘れてしまったが、もしかするとただ何か話がしたかっただけかもしれない。たわいもない世間話をしていた途中で、彼の携帯が鳴った。電話に出た彼は、相手の話を聞いてうるさそうに、

「ああ、先方の言うとおりにしたってくれ」と答えて携帯を切った。そして、

「周りからの要望や。計画より、もう一千万上乗せなってもてるんや」と、口にした。

どうやらテニスコートは周辺が田んぼや畑で、夜間の照明が問題になっているという。

まもなくこの話は始動したようだが、数年も経たず彼は経営から手を引いた。詳しいことは分からないものの、私は一年も経たないうちに音を上げるに違いないと密かに思っていた。とにかく経営は取りまきのコーチ任せで、社長たる彼は最寄り駅からの客の送迎ぐらいしかしていなかったらしい。当時私の店の並びには二軒のパチンコ店があったが、これといってやる事がなかったに違いない、彼が日中にそれらの店に通う姿をよく目にしたものであった。

私は前々から、彼のことを奇妙な男だと思っていた。例えば、同級生の一人が市議会議員に立候補したことがあった。その候補者は最初顔がやたら広い今回の彼の出来事を取り仕切った同級生に協力をもとめたが、その彼は親しい友人に現職議員がいることもあって、その役目をこの男に振った。すると彼は仕事そっちのけで動き回った。さいわい同級生は議席を得ることが出来たのだが、後に彼はこんなにも一生懸命になった事は生涯のなかでなかったと、言ったものであった。

そのくせ彼は祖父母が次々と亡くなると、その都度せっかく受け継いだ田畑をそれこそいとも簡単に売り払った。相続が発生してからの三年の間なら、税金が優遇されるからと言って。金を手にするとすぐさま、大して修繕の余地のなさそうな自宅に大工を入れたり、知り合いに大盤振る舞いをし出したりした。死んだ親父から土地は決して売るものではない、とたたき込まれて育った私には、信じがたい振る舞いであった。

自宅の売却話が伝わってきたのは、今から十年ほど前の市議会議員の選挙が行われた直後のことだった。彼はこのときも、以前とは違う候補の応援のため走り回った後であった。私はこの手の話には極力関わりを持たない者なのだが、それでもしがらみというものがあるって、彼が関わった候補者の集まりにも二、三度足を運んだことがあった。その時に妙に思ったのが、幼なじみのそばにいつも寄り添うようにこの飲み屋の女がいたことであった。彼の見送りは、結局の所、同級生で執り行うこととなった。別れた妻も、ふたりの子供達も、実の姉もかわりを拒否した。直葬の費用は主に同級生のカンパでまかなわれた。先日この幼なじみの骨納めを同級生達と同居人とで済ませた。生まれ育った町を見渡せる小高い丘で、十五人ほど人が集まり、彼を土に返した。考えようによっては、賑やかな見送りであった。